

特別史跡 平城宮跡 第一次大極殿

第一次大極殿 関連年表

昭和57年(1982)	第一次大極殿復原初案
平成4年(1992)	第一次大極殿復原研究開始
平成5年(1993)	第一次大極殿100分の1模型制作
平成6年(1994)	第一次大極殿10分の1模型制作
平成7年(1995)	基本設計
平成8年(1996)	伝統木構造建築の構造特性実験等実施設計
平成9年(1997)	実施設計準備調査
平成10年(1998)	実施設計
平成13年(2001)	復原整備工事着手
平成16年(2004)	立柱
平成18年(2006)	上棟
平成22年(2010)	竣工

大極殿の大きさ

東西長さ/約44.0m(九間)
南北長さ/約19.5m(四間)
高さ(棟高)/約27.1m※
※基壇高さ約3.4mを含む

初重の柱

直径/約71cm
長さ/約5.0m
本数/44本

二重の柱

直径/約59cm
長さ/約2.4m
本数/22本

木 材/檜・櫻(吉野・熊野地方を中心とする国内産)
屋根瓦/約10万枚
工 期/着工:平成13年(2001)・完成:平成22年(2010)



近鉄「大和西大寺」下車、徒歩20分
JR奈良駅・近鉄奈良駅から西大寺行きバスにて
「佐紀町」下車、徒歩10分

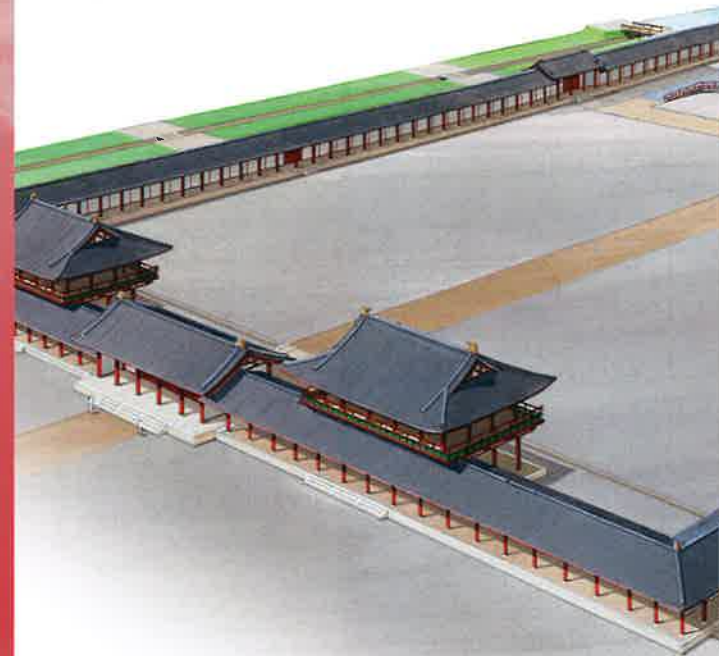
休 園 日 : 月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、年末年始休園
開園時間 : 9:00~16:30(入園は16:00まで)
入 園 料 : 無 料

文化庁文化財部記念物課

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2
TEL 03-5253-4111(文部科学省代表)
<http://www.bunka.go.jp>

資料提供: 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

第一次大極殿復原原図



発掘調査

昭和40年(1965)から第一次大極殿地区の発掘調査が開始されましたが、奈良時代後半、同じ場所に「西宮」が造営されたことから、第一次大極殿は地中にその痕跡をほとんど残していませんでした。そうしたなか、大極殿の基壇及び階段の地覆石(じふくいし)の痕跡と見なされる溝状遺構が部分的に検出されました。それらをもとにした調査・研究の成果により基壇や階段の規模を確定したのです。



遺構検出状況

建物の西側半分。人は柱推定位置。南西から



第一次大極殿の遺構平面図



遺構面

第一次大極殿の復原研究

第一次大極殿は、その機能と象徴性、同年代の寺院金堂の形式から、重層建物であったと推定しました。平面上でも立面上でも巨大な規模を持つ大極殿は、古代の建築技術の限界に挑むような建物といえます。よって、現存する古代建築の構造・意匠・技法を徹底的に再分析し、技術の原理を追求することによって、遺構に合致する形態を模索しました。

平面

基壇は、二重基壇の形式で復原しました。建物の初重は、東西9間、南北4間の規模を持つ前面吹放しとし、二重は、初重身舎より各面0.5尺ずつ広く、柱間は初重より1間ずつ少ない正面8面、奥行3間の規模としました。



屋根の形

二重の屋根形式は、両側面に三角形の妻が顔を出す入母屋造りで復原しました。『年中行事絵巻』の平安宮大極殿の屋根形式や奈良時代以前の重層寺院金堂の例等からの推定です。



大極殿からの眺め
(イラスト早川和子)

重層の構造

平面が大規模でかつ重層である大極殿は、特徴を調査した結果、現存唯一の重層金堂である法隆寺金堂の形式が優れた合理性を持つことがわかり、大極殿の構造もその原理に依拠しました。



組物と軒

軒の出は16尺に復原し、薬師寺東塔にならい、垂木を2段に出す二軒としました。組物は、軒の出より、古代で最も格の高い三手先組物とし、形式、意匠ともに時代の近い薬師寺東塔の組物にならいました。



■高御産
天皇が産座する玉座です。各種文献史料等を参照して製作した実物大のイメージ模型です。

外部の形

高欄



束の上に五行色に対応する5種の色玉を配した宝珠付き金具を打ちました。

礎石



礎石は、ほとんど凝灰岩製ですが、荷重のかかる四隅は花崗岩を使用しました。

柱



直径を709mm、高さ5.0mとし、下から1/3より上に徐々にすぼまる形式としました。

鷲尾と大棟中央飾り



法隆寺の宝珠を参考に、鷲尾は、初唐様式の影響の強い形に復原しました。

屋根瓦



しっとりとした黒色は大極殿出土瓦特有の色で、出土遺物を忠実に復原しました。

扁額



肩と脚が張り出す形式で復原。年代の近い「長屋王願経」奥書から集字しました。

内部の形

二重の内部



二重は格式の高い外観を造るために設けられたと考えられています。

天井



天井桁の間に太い木材を格子状に組んで上に板を載せた組入天井という形式です。

小壁彩色



四周に巡る小壁に四神・十二支を彩色しています。上村淳之画伯によるものです。

扉



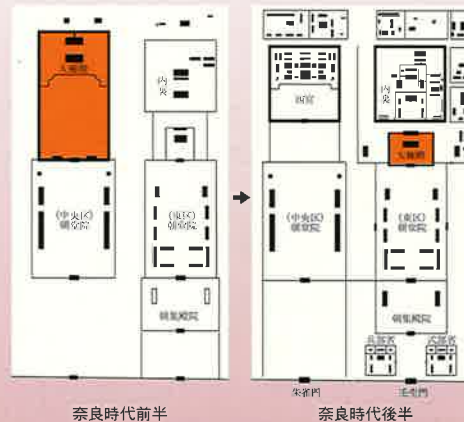
正面が開放のため扉に強い風圧がかかることなどから内開きと推定しました。



第一次大極殿

大極殿とは古代の宮都における中心施設で、元日朝賀や天皇の即位など、国家儀式の際に天皇が出御する場所です。平城宮には、造営当初から恭仁京へ遷都するまでの大極殿（第一次大極殿）と、平城京に遷都してから長岡京に遷都するまでの大極殿（第二次大極殿）の二つの大極殿が確認されています。第一次大極殿院は、南北約320m、東西約180mの区画で、北側を一段高くし大極殿と後殿を南北に配置します。壇の南側は儀式の際に貴族が整列した広場です。これは、唐の長安城大明宮にある含元殿にならって造られたと考えられています。周囲は築地回廊で囲まれ、南面には南門とその東西に楼閣を構えていました。

平城宮中枢部の変遷



奈良時代前半の第一次大極殿の建物は、恭仁京遷都の際に回廊と共に解体され、移築されました。その後、恭仁京大極殿は山城国分寺に施入れられ、現在も当時の礎石が残っています。奈良時代後半の第二次大極殿は、第一次大極殿のあった朱雀門の北側の区画ではなく、内裏のある東側の区画に造られました。この時期、第一次大極殿のあった場所は大幅に改造され、称徳天皇の西宮として利用されることになりました。

奈良時代前半

奈良時代後半